

地域の伝説・伝承データベース作成と活用の可能性 ～尼崎を事例に～

大江篤^{†1} 久禮旦雄^{†2} 久留島元^{†3}

地域に根差した伝承を採集し集積することは、柳田國男によって提唱された日本民俗学のおおきな課題のひとつである。しかし多くの場合、集積されたデータは専門の研究者たちによって活用され、地域住民自身によるアクセスは困難である。本データベースは兵庫県尼崎市における怪異・妖怪等フシギなコトやモノにまつわる伝説、伝承の一覧をめざすが、その際、データベース作成者のバイアスにより原資料の表現、認識が変わってしまう危険性を指摘する。そのうえでデータベースを地域資源のひとつに位置づけ、一般の地域住民にも確実な原資料へアクセスできるかたちでの公開について報告する。

To make a database of regional folklore, and to research the possibility of utilizing the database ～A case study of Amagasaki～

OE ATSUSHI^{†1} KURE ASAO^{†2} KURUSHIMA HAJIME^{†3}

Collecting and accumulating regional folk tales is one of the major themes Kunio Yanagita has proposed for Japanese Folklore. In many cases, however, accumulated database is utilized by only specific researchers. Local residents are difficult to access to the database. We are aiming to list the legends and lore of mysterious presences and strange incidents, known as “Yokai” and “Kaii” in Amagasaki, Hyogo prefecture. But we here point out that expression of recognition of original material may be endangered to the changes possibly caused by prejudice of producers who made the database. Recognizing the danger, we evaluate the database as one of the valuable regional resources. And we’d like to propose the certain way opening the original resources to regional people.

1. 文化遺産としての「怪異」「怪談」

本データベースは尼崎市域六行政区に伝わる、怪異・霊験譚、あるいは妖怪に関する話などいわゆる「フシギな話」を一覧としたもので、文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（大学COC事業）に採択された園田学園女子大学の「＜地域＞と＜大学＞をつなぐ経験値教育プログラム」における地域志向研究の一環として作成しているものである a。

このような「フシギな話」は、本来地域に根差したコミュニティによって伝承されていくものであり、それ自体がひとつの文化遺産と言える（大江篤「尼に伝わる不思議な話」『南部再生』Vol.47, pp.20-21(2014)）。

一般に、地域の文化財といえば仏像や建築物、歴史的事件の現場（史跡）など、学術的あるいは芸術的な価値の高いものを対象とする。しかし、地域に根ざした伝説、伝承から地域の歴史を明らかにすることを重視したのが柳田國男であった。のちに宮本常一は、『遠野物語』を読んだときの感想を次のように述べている。（下線部、引用者：以下同）

『遠野物語』を読みまして私自身がいちばんびっくりしたことは、じつはそこに出てくる話は、内容は違いますが、われわれ子供のときにしょっちゅう聞いておった話なんですね。それが書かれている。しかもそれがわれわれからしますと、ひじょうに簡潔な美文なんですね。われわれは、そういう話はごくありふれた話なので、つまらないものと思っておった。それがそうではなかった。そして、こういうふうに表示すればそういうものになるのかという、そういう驚きがついたんですね。……そうしてこういうものが学問の素材になるのかということをはじょうに強く考えさせられたんですね。（伊藤幹治、米山俊直：柳田國男の世界、日本放送出版会、1976）

このように「ありふれた」「つまらない」ものを「学問の素材」として、いわば「ありふれた」人々の生活、歴史を再現する手段として再評価したのが柳田民俗学の功績であった。

また同じく宮本常一は「世間話」と「昔話」との違いについて述べる部分で、次のような発言をしている。

【宮本】ところが、『今昔』や『宇治拾遺』や『古今著聞集』などを見ても、あの時代には、世間話として語ら

†1 園田学園女子大学人間教育学部
Sonoda Women's University

†2 日本学術振興会特別研究員
Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science

†3 園田学園女子大学地域連携推進機構
Sonoda Women's University

a 現在作成中のデータは『地域連携推進機構年報』Vol.1, pp.4-17 (2014)に掲載。

れていたんだと思いますよ。文字にされれば当然、人名も地名もはつきり入る。しかし、話される場合は、自分に縁もゆかりもない地名やむずかしい名前はまず落ちるでしょう。そうして落ちたものが日から口へ伝えられて、ああいいう形ができてきたのではないのでしょうか。文字化されたものとそうでないものの違いですね。今まで伝説として取り上げられてきたものを、子供の話として扱ったらどうだろうか。今、私は多くの人びとに年寄のライフヒストリーを採るようにいっているのですが、これをやると必ず、自分の体験として《不思議》というのが出てくるのですよ。この不思議に支えられたものが、ずいぶん多いのですよ。論理に合わないことに出会っているのですね。大体七十歳位以上のお年寄は、これらは、昔は、世間話として捉えられていたのですが、今はそうではないですね。昔話が今は固定化せられて、あるタイプが問題にされるのですが、それをそのようなものとして温存させたもう一つ外側の枠のほうが、実はもっと大切じゃないかと思います。典型的な話を集めた昔話集も大切なのです。そしてそれがずいぶんたくさん出ています。しかし話の語られた状況や環境について書かれたものは少ないのです。(フォークロア、Vol. 2、1997)

「フシギな話」はあたりまえの暮らしの中で語られる「世間話」であり、「怪談」や「妖怪」としてエンターテインメントとは異なる語りであったといえよう。それぞれの地域や人々の生活に根差したものであったことが重要である。

柳田の試みは次の世代にも継承され、全国的な民俗調査が収集された。その結果、様々な「フシギな話」が蓄積された。また、柳田以前にも江戸時代の地誌や怪談集に同様の記事が書き留められている。兵庫県に限っても播磨地域の『西播怪談実記』や丹波地域の『多紀郡郷土史考』、但馬地域では兵庫県教育委員会編『但馬海岸』(1974)などが確認できる(大江篤：兵庫の怪談、幽、Vol.17、2012)。

しかし、これらのデータは基本的に研究者が活用するもので、一般の市民によるアクセスは困難な状況であった。そのため、近年の妖怪・怪談などへの関心の高まりとともに、これらの情報を地図や書籍などにまとめ、町おこしと連動して活用する試みが広まっている。

たとえば姫路商工会議所青年部伝説・『MACHIOKOSHI』委員会作成、播磨学研究所研究員埴岡真弓監修「播州姫路伝説巡覧図絵」、愛知県豊橋市の株式会社うちうら(代表取締役社長 内浦有美氏)による「豊橋妖怪MAP」・『豊橋妖怪百物語』、愛知県田原市における電子書籍『お散歩 e 本ふしぎ編』などが代表的なものである。

尼崎地域では、すでに尼崎郷土史研究会会報『みちるべ』33号・34号に、先行する史料・地誌・伝説集や聞き取りなどをもとにした「特集 尼崎の伝説」が掲載されている。本データベースはこれに基づき、そのほか『近畿民俗』

55、坂江渉『神戸・阪神間の古代史』などを参照し、大江篤の指導のもと、共同研究員の久禮旦雄・久留島元が入力作業を行い、作成している。

本報告では、データベースの構築作業を進めていくなかで明らかとなった課題について、二つの事例を紹介し、検討を加えていきたい。

2. 資料の要約による危険性 ～「お菊虫」伝承について～

データベース作成にまつわる問題として、データベース化にあたり原資料を要約した際にともなう情報の錯誤の可能性について述べる。特に二種類以上の資料を統合し要約すると、原資料の表現が損なわれ、伝承が変わってしまう可能性がある。ここでは尼崎に伝わる「お菊虫」伝承についての事例を紹介する。

本データベースの基幹となった「特集 尼崎の伝説」(みちるべ、Vol.33、2005)には、「皿屋敷(お米虫)」の伝承が次のように記載される。

元禄の頃、尼崎に悪い家老がいました。彼は侍女のお米(お菊とも伝えられている)に懸想しましたが、とりあってくれません。腹を立てた家老は、お米が取り扱っている殿様の大切な皿(深鉢とも言い伝える)を一枚隠し、お米の責任にして、お米を殺し、庭の井戸へ沈めました。／お米の怨霊は「お米虫」(あるいはお菊虫)と言う虫に生まれ変わったといわれ、『尼崎今昔物語』には、柑橘類の葉から、細い糸でぶらさがっている虫だと書かれています。／その後、家老の家には、いろいろと祟りがあり、ついには改易になったと伝えられています。／この伝説の場所は、一般に大物の深正院のように言われています。ただ、『尼崎志』は、深正院の門が、もと家老屋敷の門であったと伝えられていたことや、その場所に元禄時代の藩主の菩提寺があったことから、皿屋敷伝説と深正院が結びついていたのではないかと考察しています。

「お菊」とも「お米」とも伝えられる侍女が、皿を割った過失のため殺されて井戸に投げ込まれ、その「怨霊」が虫になったという。全国に流布する「お菊皿屋敷」の話型であり、いかにも地域に根付いた伝承にみえる。参考文献としては『尼崎現勢史』、『尼崎志』1、『上方』59、『尼崎今昔物語』、『尼崎の伝説』、『TOMORROW』の6点があげられている。

しかし、この記事は主に『現勢史』と『尼崎志』の伝承を組み合わせで創られたものと推測される。ふたつの記事は、登場人物の名前や事件の発端に違いがある。

まず『現勢史』には「藩老青山曲膳」が侍女「お菊」に恋慕したが応じなかったため、秘蔵の皿を割った罪をもって「手打ち」にした、とする(富田重義、前川佐雄：名所

旧蹟 尼崎に於ける伝説, 尼崎現勢史, 土井源友堂, p.247, 1916). 一方、『尼崎志』は、尼崎の伝承を小説「銀のこうがい」から流布したものと述べ、「侍女の名は辰巳の漁師の娘お米」, 「悪家老は何某玄蕃」とし、さら「皿を中心とする怪説」は「傍系」とする。そして「井戸及び境内にはお菊虫か、お米虫かゞ発生する」という（永尾利三郎：尼崎志, Vol.1, 尼崎市, 1930, 1974 復刻, pp.352-353）。

「お米」が殺害された理由は『尼崎志』からだけでは不明であるが、『尼崎志』の紹介する近世の実録体小説『銀の筈』（「銀のこうがい」, 寛延四年<1751>序）では、家老・喜多玄蕃の飯椀に針が混入していたため、給仕をしていたお米が責め殺されその母も後を追った、となっている（早稲田大学所蔵『銀の筈』翻刻・解題, 地域連携推進機構年報, Vol.1, 2014）。ここでは秘蔵の皿を割る話題もなく、また「お米虫」も登場しない。

しかし『みちしるべ』では『銀の筈』については触れず、「悪い家老」が侍女に懸想して皿を隠した、という。ここには『現勢史』記事と『尼崎志』記事の混同がある。これは『みちしるべ』において「皿屋敷（お米虫）」として統合したために起きた問題といえる。

『尼崎今昔物語』などを参照する限り、尼崎に伝わる伝承は井戸周辺に出現する「お菊虫」にまつわる伝承であり、「お米」ないし「お米虫」の名が伝承されていた形跡はないb。「お米」の名は『銀の筈』にのみ登場する。これは同じく尼崎の伝承を記す『石楠堂随筆』, 『耳袋』, 『甲子夜話』などの近世随筆も同様であり、伝承には小異があるが、侍女の名は「お菊」で統一されるc。

また、管見の限りでは尼崎において、侍女が殺害された理由を「皿を割った」とする文献は、『尼崎現勢史』よりさかのぼることはできないのである。

従来、民俗調査や文献によって得られた伝説・伝承を総覧する資料は、専門誌や市町村史、あるいは報告書などの形で発表されてきた。限られた紙幅のなかで採集された事例を整理・紹介する必要がある場合、資料の要約や統合はやむをえない。しかし、そのため原資料の表現が損なわれ、

b 畠田繁太郎：尼崎今昔物語, 伊藤靖, p.418 (1964)「一三五、伊達一とお菊虫」

お菊虫といふのは、一本の絹糸見たような繊細な糸で、身を繋いで、まるで中づりになって自殺をしたやうな格好で、それがよく柑橘類の葉裏に懸かつてあるが、長遠寺と全昌寺の墓場が、他の墓場より一等多いんです。

そして又それが、石碑の表面、戒名なんか彫つてある深掘の処に懸つてあたり、碑の面とりのしてある額のふちなんか引ツかゝつてみると、随分変な心持がする。子供心に一種の冥想が起つて、例の皿屋敷に引つ張り込まれてしまふ。深正院の井戸にまつはる噂話なども、もともとこの辺から飛び出した創作じやないですか。成人してからのお菊虫は、五六月頃に孵化して鳳蝶になって、美しい羽を弄して花から花へ飛び遊ぶと子供の時分から教はつてはゐる。さうだと思つてはゐる。けどその羽根の生へる所を見たことがないから、何だか腹のドン底には、まだやつぱり、薄倅な女中お菊が青山主膳に虐げられて井戸へはまつた不気味な幽霊話がこびり附いて、あのお菊虫には好感がもてない。

cなお、『みちしるべ』では地元の文献を優先しているため、これら近世随筆に収録された伝承については視野が及んでいない。データベースとしては今後も随時、更新を続けていく必要がある。

報告者によって別の伝承が生み出される危険性がある。

データベース化に際しても、ある程度の分類、統合は必要となってくるが、原資料との対応を明記することにより表現の異同、個々の「語り」の独自性を、できるかぎり反映すべきではないだろうか。

3. 伝説・伝承データベース活用の可能性

～「馬橋」について～

本データベースの活用方法として、ひとつの「語り」としてそれぞれの記事を整理・検討することで従来見落とされてきた比較の視点を得られる可能性を述べる。

本データベースに、『みちしるべ』をもとに入力した「馬橋」に関する伝説がある。

馬橋という場所で、落ち武者に助けを求められた百姓が逆に、追手と共に殺してしまったため、その地域の人を通りかかると、「たちまち行く手が暗くなって、歩けなくなった」「村人が大勢出て、その人の名を呼ぶと、それを頼りに変えることができた、という。また、荒木村重がいたころ、友御前という姫君が小寺家の門前に隠れていることが密告され、姫君は馬橋のあたりで殺された。その後、密告した地域の村人がそこを通ろうとすると白い馬が現れて邪魔をするため、村人が大声で呼ぶと、馬が消えて通れるようになったという（前掲、みちしるべ, Vol.33）。

これは一見すると、落ち武者や姫君の霊が、村人にわざわいを為すという、ある種の「怪談」であるが、行く手が暗くなり、前に進めなくなるという点では、九州に伝わるヌリカベなどのいわゆる「妖怪」とされる伝承とも共通する。

ヌリカベは福岡県遠賀郡に伝わる伝承であり、「夜路をあるいていると、急に行く先が壁になり、どこへも行けぬことがある。それを塗り壁といって怖れられている」が「棒をもって下を払うと消える」という（柳田國男：妖怪名彙, 妖怪談義, 角川ソフィア文庫 2013. 初出, 民間伝承, 4-1, 1938）。同様の話としては高知県幡豆郡に伝わる「ノブスマ」があり、それは「夜、行く手の路に襖のように壁のように立つ。上に撫でても下に撫でても右へさぐっても左へさぐっても果てる場所がない」が「落ち着いて煙草でも二、三服している間には消失する」（中平悦麿：ノブスマ, 民間伝承, 4-2, 1938）。

いずれも進行方向に遮蔽物が現れ、何らかのリアクションをすると消滅する d。そしてこの出現と対応のパターンは「馬橋」に関する二つの伝承にも共通しているのである。

これは、例えば「落武者の霊」といった名称や、小寺家（黒田家か）に関する伝承といった歴史上の人物の名前で

d 今野円輔：日本怪談集 妖怪編 (1981)。このような「妖怪」の機能に着目し、文学作品なども含めた分析を行っているものとして化野燐の一連の研究がある。化野燐：妖怪の分類・試論, 怪, vol.0012-0022 (2001-2007)

分類しては抜け落ちてしまう視点である。名称ではなく、「語り」そのものをできるだけデータ化しようとする理由は、そのような新しい視点を以てデータの活用を永続的に可能たらしめようというところにある。



図 1 馬橋付近



図 2 馬橋旧蹟

4. まとめ

尼崎市の「フシギ」伝説・伝承データベースは、現在、構築中であるが、まず話の概要をつかむための「要約」と、出典資料との対応関係を明確にする。そして、研究拠点である大学が提供する伝説・伝承データベースの特性として、データベースから直接確実な原資料に遡及できるようにしていきたい。原資料へアクセスできる道を示すことで、データベースの利用者の自発的な「学び」を喚起し、多方面

からの検証を可能とすることができると思われる。

また、将来的には収集した伝説・伝承からおおよそ 100 話を選定し、『尼崎百物語（仮）』として地図化や、典拠史料の検討、現地調査の結果などを加えたうえで書籍とすることを予定している。さらに、地域におけるワークショップを通じて、新たな「フシギ」を発掘するフィールドワークも計画中である。

「怪異」「妖怪」伝承は、曖昧な語りであるため、残された記録や伝承を客観的に読解し、一つひとつの語句に対しても厳密でなければならない。データベース化するにあたって作成者が通俗的な語句に置き換えたり、話を編集したりすることは慎まなければならない。文献資料、民俗資料のいずれにおいても資料批判をふまえた研究成果に基づき、データベースを作成していく必要があると考える。

参考文献

- 1) 富田重義, 前川佐雄: 名所旧蹟 尼崎に於ける伝説, 尼崎現勢史, 土井源友堂, p.247(1916)
- 2) 中平悦麿, ノブスマ, 民間伝承, 4-2(1938)
- 3) 畠田繁太郎: 尼崎今昔物語, 伊藤靖(1964)
- 4) 永尾利三郎: 尼崎志, Vol.1, 尼崎市, pp.352-353(1974)
- 5) 伊藤幹治, 米山俊直: 柳田國男の世界, 日本放送出版会(1976)
- 6) 今野円輔: 日本怪談集 妖怪編(1981)
- 7) 宮本常一, 谷川健一: 対談, フォークロア, Vol.2(1997)
- 8) 化野燐: 妖怪の分類・試論, 怪, vol.0012~0022(2001-2007)
- 9) 特集 尼崎の伝説, みちしるべ, Vol.33(2005)
- 10) 大江篤: 兵庫の怪談, 幽, Vol.17(2012)
- 11) 柳田國男: 妖怪名彙, 妖怪談義, 角川ソフィア文庫(2013)
- 12) 大江篤「尼に伝わる不思議な話」『南部再生』Vol.47, pp.20-21(2014)
- 13) 大江篤, 久禮旦雄, 久留島元「尼崎伝説データベース(稿)」『地域連携推進機構年報』Vol.1, pp.4-17(2014)
- 14) 早稲田大学所蔵『銀の笄』翻刻・解題, 地域連携推進機構年報, Vol.1, pp.86-77 (2014)